

ふるさと歴史散歩

With ジャーナーなる洞南

岡山直道頌徳碑

(北鷹見町1-2)

金光教の敷地内に岡山直道頌徳碑頌徳碑がある。岡山直道は弘化元年(1844年)福岡藩士左次郎直供の次男として生まれる。元治元年(1864年)藩の学問所指南役となり、明治2年(1869年)福岡に漢学私塾を開く。明治4年廃藩置県により藩学校が廃止された。その頃、有志の招きで遠賀郡香月村に余力学舎を開く。その後、香月小学校の

教師や県立芦屋中学校教授を経て、同十五年、本城村に開校された私塾岡洞校の教師に招かれ郷土の教育に貢献。杉野又八郎宅が学舎となった。同十七年水巻村吉田に塾を開いたが同十八年鞍手郡感田村有志者の招きで真香校に転じ、吉田の塾は林次敏に託した。同二十年折尾村に私塾岡洞校を再び開いた。門人となる者多く、その数は千人を越えた。同三十五年福岡県教育遠賀支部会長は先生の多年にわた



る教育の功績を表彰し、日本大辞林を贈与した。同三十八年教育を受けた門下生が還暦を記念して頌徳碑を建てた。題字は黒田長成(黒田藩最後の藩主)の筆である。明治40年(1907年)六十三歳で没した。なお、遠賀川(堀川)疏水碑も目と鼻の先にある。

花だより 14

イネ(稲)

稲は日本の農業、文化の根幹であり、古来神道や宮中祭祀とも深く結びついてきました。

稲に係わる言葉は多く、中でも驚かされるのが「いなす(い)ま」。稲の夫(いな)という意味です。古代人は稲穂を女性、天から落ちて来る強烈な光を男性と考え、二つが交わることで実を結ぶと信じていました。かつて「夫」は「つま」と読み、男女の別なく配偶者を指しましたが、後世この字を



「つま」と読まなくなり「稲妻」の字が当てられました。きらめく水面に整然と並ぶ早苗、夜の田に写る月、一陣の風に波立つ青田、豊かに頭を垂れる金色の稲穂、刈り株の田に置く霜。稲は思い浮かべるだけで特別な感情を呼び覚まされる植物です。

編集後記

昨年七月のメイ首相登場以来、今年一月のトランプ大統領、五月のムン大統領、マクロン大統領：各国民の価値観の変化を感じます。相次ぐテロ、恐れを知らぬ北朝鮮。激動の世界の中で何をなすべきか、真剣に考えさせられる日々です。

我が国では「坊主憎けりや袈裟まで」何とも情けない野党と一部マスコミ。今やるべきことはそれかと問いたくなります。

今年も半ばを越えました。残る半分を有意義に過ごしたいものです。

編集局 江頭保浩
小野るみ

Vol.21

小さなまちかど

オビドス

(ポルトガル)

首都リスボンの北、約八〇キロ。小高い丘の上に、城壁で囲まれた南北約六五〇m、東西(最大)二〇〇mほどの小さな街「オビドス」があります。「谷間の真珠」という、美しい別称

を与えられたこの街は十三世紀、ディニス王から王妃イザベルに贈られ、以後歴代王妃の直轄地となりました。

王から王妃へのウエディング・プレゼントだったとも、王妃がねだって手に入れたとも言われますが、彼女が信仰に篤く、貧しい人々を助け、紛争を和解させ、その徳性によって死後三百年を経て聖女に列せ

られたことを考えると、王からの贈り物とする方がふさわしい気がします。

中世の面影を色濃く残す城壁の内側は、由緒ある小さな教会、古い石畳の細い路地、黄色と青で彩られた白壁、乾いたオレンジ色の屋根がたとえようもなく愛らしく、わずかなスペースに植えられた鮮やかな花々が街に彩りを添えています。城壁に登れば



小さな街を見渡すことができますが、手すりはない、石造りで足元が悪い

ため、安全には十分配慮が必要です。

城壁の北東には十五世紀に創建されたオビドス城があり、現在ポザーダと呼ばれる人気の宿泊施設になっています。ただ、客室は一七(うち八室は新館)とあって、予約はなかなか難しいようです。

